The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	チリのポスト軍政期文学における社会的包摂 : エルティッツとスリータの研究に関するメモ書き
Author(s)	松本, 健二
Citation	Estudios Hispánicos. 2020, 44, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（研究ノート）

チリのポスト軍政期文学における社会的包摂
——エルティッツとスリータの研究に関するメモ書き——

松　本　健　二

ディアメラ・エルティッツ（Diamale Eltit, 1947-）はチリにおけるポスト軍政期文学を代表する作家で、軍事政権下で芸術家集団 CADA の一員として街頭パフォーマンスを中心とする表現行為に加わり、その後 1983 年に小説『ルンペリカ』を発表して活動の拠点を本格的に文学へと移した。いっぽう詩人ラウル・スリータ（Raúl Zurita, 1950-）もまたエルティッツらと CADA に加わり、その後は詩という形で文学的創作活動を続けている。軍事政権下の検閲があるなかで創作を開始し、民政移管を見届けたエルティッツとスリータは、ともにチリにおけるいわゆる〈移行期〉の文学を代表する存在となってきた。筆者はこれまで資料整理を中心にこの二人の作家に関する研究を進めてきたが、ともに現役で活動し今なお作品を発表し続けていること、またチリにおける移行期の真相究明と和解形成に関する諸言説との相関関係などを考慮すれば、より長期的視野に立った考証が今後とも必要になると思われる。本稿ではその概括的な構想を二人の文学活動における社会的包摂（inclusión social）という概念を軸に簡単に整理しておくこととする。

1. エルティッツ『ルンペリカ』について

エルティッツは実験的手法による小説やエッセイ、さらには写真等の非文字媒体との共同制作を主たる表現の場としてきた。難解で一定の物語を観測しにくいその前衛的小説のスタイルは『ルンペリカ』（*Lumpérica.* 1983）をはじめとする初期四作品、すなわち『祖国のために』（*Por la patria.* 1986）、『第四世界』（*El cuarto mundo.* 1988）、『聖なる牝牛』（*Vaca sagrada.* 1991）という軍政末期に書かれた作品群で形成されたものである。なかでも小説『ルンペリカ』はエルティッツのその後の小説作法を凝縮したともいえる作風で、各国語による先行研究も必ずこの作品に言及している。

『ルンペリカ』は計十章で形成されるが、全体として明確なプロットのある小説ではない。舞台はサンティアゴのどこかの広場で、そこを囲むビル群の広告塔のネオンサインで照らし出されている。夜間、その広場にひとりの女性と数人のルンペンたちがいる、という状況だけは確認できるが、それ以外に時間を追って進んでいく物語はいっさい観測できず、ただ彼らの動作、表情などが延々と描写される。描写の手法も一定の語り手をもたない自由かつ不規則なものであり、また刊行当時はチリ国内で文学作品に関する検閲が存在し、それを意識したエルティッツ自身が容易な解釈を招く文体を意図的に排除したと考えられている。CADA での体験が色濃く影響を及ぼしているこの『ルンペリカ』とは、読み手の情動を喚起することを目的とはせず、批判的な解釈行為のみを要求するという、いわばある種の開かれた概念小説なのであり、こうした作品をめぐる議論はプロットや人物の描かれ方といった伝統的小説において分析対象となりがちな要素よりも、その構造や文体が意図しているもの、もしくは意図的に隠ぺいしたものなどをめぐるものになる。

作品が刊行された時期サンティアゴでは夜間外出禁止令（toque de queda）が常態化していたことを考えれば、女性の主人公（と思しき人物）が公共の広場にいること自体がひとつの挑発行為になり得る。名もなき女性のルンペンとして現れた主人公は、同じ広場にいる男性のルンペンたちの前で自らの身体を誇示し、ネオンサインに照らされ様々な動作を繰り広げる。ここで描かれているのは独裁体制下での〈眼差し〉をめぐる闘争であるという指摘がある。独裁政権による監視体制の眼差し、ネオンサインという資本主義体制を象徴する照明、男性ルンペンたちや読者をも含めたある種のポルノ鑑賞者による眼差しなど、女性主人公を取り巻く無数の攻撃的で征圧的な眼差しや投光と、それに抗い、無名の存在から徐々に一個の主体性を確保してゆく主人公との闘争が看取できるという読み方である。

また『ルンペリカ』においては映像を言語化した断章（作品外でエルティッツ自身が作品の一部を朗読した映像記録も残されている）、ト書きのような文章をふくむ舞台脚本、注釈、尋問者と被尋問者による対話の録音記録、意識の流れといった様々な文体が、ときには字体を変え、全体としては現代美術におけるアサンブラージュのような〈継ぎ接ぎ〉とでも呼ぶしかない状況を呈し、これがしばしばプロット不在と指摘される原因になっている。語り手、語り手の視点や立ち位置、語られる人物像、すべてが流動的で確固た

る主体と主体のあいだの境界線が消失しているのも大きな特徴である。エルティッツはこうした手法によりチリにおける文学作品としての権威（＝作者性 autoridad）を、すなわち当時のチリにおける政治上＋文学上の権威を攻撃しているという読み方に立てば、その背景には特に小説分野において女性ライティングが極めて稀なチリ文学の特殊性が浮かび上がってくる。

題名の造語 Lumpérica の解釈をめぐっても諸説ある。代表的なところではたとえば lumpen＋América、lumpen＋rica、lumpen＋perica などで、それぞれ独自の解釈を展開し得るものである。主人公につけられた名 L iluminada も同様であり、L とは lumpen の頭文字かもしれないが作中に現れる主人公の自慰行為などを考慮すればほかにも lascivia、libido などの語が想起される。iluminada は文字通りネオンによって照らされている、すなわち主人公の置かれた〈他者の眼差し〉に絶えずさらされる状況を意味しているともいえるが、最終的にある種の啓示を受けた者と解釈することも可能である。

先行研究の多くは小説『ルンペリカ』を、国家権力と資本が手を組む場としての夜間外出禁止令がひかれた公共空間において、労働との関係で正常な経済活動から除外された周辺的存在である女性の主人公が、自傷行為、自慰行為といった自らの身体をめぐる問いかけを繰り返し、結果的に朝までその広場にひとりの主体として、すなわち一人の市民として居続けることで失われていた尊厳を取り戻すプロセスとして読み取っている。こうした解釈の方法は、場所を公共の広場から〈父権支配の家〉に移行させたともいえる『祖国のために』以降の小説にも適応し得るものだろう。

エルティッツは独裁下のチリを舞台に一貫して疎外された社会的弱者をテクストに取り組むことを目指してきた。その代表である小説『ルンペリカ』の主人公 L iluminada のような〈周縁的〉人物表象を考えるうえで参考になるのが、エルティッツが民政移管直前の 1989 年に CADA 時代の盟友であるロティ・ローゼンフェルドとサンティアゴ市内に住む統合失調症に取材した際の録音記録を文字に起こした『わが父』（*El padre mío.* 1989）や、民政移管後の 1995 年に写真家のパス・エラスリスと知的障碍者施設に暮らす夫婦や恋人たちを取材した記録をまとめた写真本『魂の梗塞』（*El Infarto del alma.* 1995）である。こうした純粋な文学創作からは一歩離れた表現行為を見てゆくと、エルティッツが、たとえば L iluminada に表象されるような、監視・消費・性といった様々な〈征圧的欲望の眼差し〉の対象とされるたとえば娼婦やストリップダンサーのような存在や、あるいは『祖国のために』

の主人公コヤの家族が置かれた社会構造上の周辺、すなわち貧困層のみならず、利潤を生みだす労働という正しい経済活動にもともと寄与することができない人々、狂気や病気というレッテルを貼られ、権力と資本が公認するいわば〈インサイダー〉の世界の外にいる存在にも注目し続け、それらをいかにして文学作品のなかに取り込もうとしているかがわかる。エルティッツが文学表現を通して目指している社会的包摂の対象とは、軍事政権下あるいはその時期に出来上がったチリの新自由主義経済体制下において、市民としての政治・経済的主体性を著しく希薄化された人々、チリの〈いま〉を生きる周縁的市民たちであるといえるだろう。

2. スリータと『新生』

ラウル・スリータに関して筆者はこれまで詩集『楽園前』、そして『その消え失せた愛に寄せる歌』に関して考察を行なってきたが、この二作はいずれも軍事政権時代に書かれたものであり、移行期をも含めたチリのポスト軍政期文学を考えるうえでは1994年に刊行された『新生（*La vida nueva.*）』をとりあげざるを得ない。

2018年に刊行された最終版では595ページに及ぶ大部の詩集『新生』はパブロ・ネルーダが1950年に刊行した『大いなる歌』を模していると指摘されることがある。チリ全土の川や海などの自然が詠まれていること、軍事政権期の失踪者や政治的迫害にあった人々や貧困層、あるいは政治的失踪者の家族らによる一人称の語りが採用されていることなど、たしかに二つの詩集はその構造において類似点が見られる。しかし、スリータの『新生』における『大いなる歌』との最大の違いは、詩が目指しているのが〈理想の追求〉や〈闘争への呼びかけ〉ではなく、どちらかと言えば〈記憶〉と〈鎮魂〉に特化している点にある。いわば未来志向のネルーダに対し、スリータは徹底的に直近の過去を記憶し、そこで起きた災厄をどのように消化するか（あるいはなぜ消化できないのか）を問い続けているように思われる。ちなみに筆者は2018年3月、知人 Milton Aguilar の紹介でスリータ本人と会うことができた。相手は多忙で持病もあることから長いインタビューを行なうことはできなかったが、ネルーダと『大いなる歌』について尋ねたところ、詩集そのものは取るに足らぬ駄作であるが、ラパヌイなどチリの自然を詠んだ詩には見るべきものがあるという主旨の話を聞くことができた。実はネ

ルーダの『大いなる歌』を英訳した Jack Schmitt は英語圏においてスリータを最初に発見したともいうべき学者で、スリータの『楽園前』の翻訳なども手掛けるなど私生活でも親密な関係にあった。『新生』最終版の謝辞の筆頭にシュミットが挙げられていることを見ても、スリータがこの米国人研究者との交流を通してネルーダの『大いなる歌』を凌駕する規模の詩集を目指す決断をした可能性も否定できないだろう。

筆者は 2019 年にサンティアゴで軍事政権時代の歴史遺構の実地調査も行なった。このうち詩集『新生』にも現れる場所が三つある。うちの二つは第二章に含まれた「板切れの国（País de las tablas）」という、軍事政権下で政治犯の収容所や拷問施設となったチリ全土に散らばる場所をテーマとした詩群に属するもので、ひとつはクーデター直後に急造の収監施設となった国立スタジアム、そしてもうひとつはピノチェト自身がクーデター時に指揮を執った空軍基地の間近にある政治犯拷問施設、旧グリマルディ邸である。スリータのこれらの詩群における tablas とは様々な意味に変容してゆく。基本的には死んでいった、あるいは失踪した人々の肉体でもあり墓標でもある。だが詩「国立スタジアム監獄（Prisión Estadio Nacional）」におけるそれはスタジアム観覧席の座席の板にも姿を変える。国立スタジアムは現在チリにおける歴史遺構に指定され、ガイド付きで見学をすることができる。筆者も地元の中学生の一団に交じって見学ツアーに同道した。現在はゴール裏の一画

写真 1

写真 2

写真 1：2019 年 9 月、サンティアゴの国立スタジアムで。公園内が歴史遺構に指定されていて、専属のガイドによる見学ツアーが毎日催されている。この日はサンティアゴ市内にある中学校の生徒たちがツアーに参加していた。収容施設等の一連の見学を行なったのち、スタジアム内に残された 1973 年当時の木のベンチに集まって最後の説明を受ける。
写真 2：木のベンチの一画の壁には Un pueblo sin memoria es un pueblo sin futuro.（記憶をもたない国民は未来をもたない国民である）の碑文が飾られている。

に 1973 年当時の板製の座席が残され、ツアー客は最後、そこに着席してガイドによる当時の状況に耳を傾けることになる。

旧グリマルディ邸も現在では歷史遺構として整備され、拷問施設だった当時の様子が再現され、ガイド付きのツアーが実施されている。ここにもサンティアゴ市内の中学生、高校生が教育の一環として見学ツアーに参加していた。スリータの詩「グリマルディ邸監獄（Prisión Villa Grimladi）」における tablas は、この施設で拷問され、そして生きたまま梱包されて板切れのようにヘリで運ばれ海上に投棄された政治犯たちの体を意味することになる。二行目の ciegas tablas とは目隠しをされ、あるいは布でぐるぐる巻きにされて殺されていった政治的失踪者たちに言及しているのである。

写真 3

写真 4

写真 3：2019 年 9 月、サンティアゴ市内の旧グリマルディ邸で。屋敷全体が歷史遺構に指定され、やはり学生などを対象にした見学ツアーが実施されている。
写真 4：1973 年からの 3 年間、グリマルディ邸は軍部による拷問施設として機能した。ここで拷問され失踪したままになっている若者の多くは荷物のように梱包された後ヘリで海上に投棄されたことが軍関係者の証言などから明らかにされている。その詳細を記した展示も見ることができる。

忌まわしい暴力の正確な記憶と鎮魂、この二つを詩のなかで同時に果たすというスリータの意図がもっともよく表れているのは『新生』の刊行に際して新たに再録された『その消え失せた愛に寄せる歌』の一節である。それが

詩集のなかの原文とは少し形を変えた状態で、サンティアゴ市中央墓苑にある政治的被処刑者および失踪者の碑の上部に刻まれている。

写真 5

写真 6

Todo mi amor está aquí pegado a las rocas al mar a las montañas.
わが愛はすべてここに　岩に　海に　山にはりついて

この句はスリータの詩学をまさに象徴していると言っても過言ではないだろう。冒頭の所有詞 mi の主体を、この石碑をもっとも頻繁に訪れるはずの人々、すなわち犠牲者や失踪者の遺族だとすれば、この amor とは彼らにとって大切な息子や娘、家族の一員であり、彼らの消えてしまった肉体であると読むことができる。失踪者が遺棄された場所はチリ全土に散らばっているが、それは北部ピサグア収容所に代表される砂漠地帯の〈岩〉でもあれば、南部ドーソン刑務所に代表される〈山〉でもあり、あるいは旧グリマルディ邸からヘリで運ばれた政治犯が投棄されたといわれる〈海〉でもある。彼らの名は石碑に刻まれ〈ここ〉にあると同時に、それらはいまだ発見されぬままチリのどこかの岩に〈はりついて〉いる。この句を読む者は、その下に刻まれた犠牲者と失踪者の名と殺害および失踪の日付を見つつ、このオブジェが災厄を記憶するための装置として機能していることを知る。いっぽう、冒頭の所有詞 mi を読み手が我がこととしてとらえた場合、この句は死者に寄り添う鎮魂の場としてその新たな姿を現し始めるのである。記憶と鎮魂、この二つの行為をひとつの詩のなかで同時に成し遂げるという、スリータのあらゆる詩に共通する戦略が凝縮された碑文と言えるだろう。スリータが詩のなかで意図せずして実践している社会的包摂とは、死者、失踪者など、現在のチリには〈不在の〉人々の尊厳回復をも含む規模の行為であるといえる。

3. エルティッツとスリータにおける社会的包摂とは

2019年のサンティアゴでは、地下鉄値上げという、一見すると非常に些細な出来事から貧困層や若い失業者を中心とする市民が大規模な暴動を起こすに至り、ピノチェト時代に生まれた経済的格差が解消されるどころか深化しつつある現状が改めて浮き彫りになった。筆者は暴動の起きる直前、9月11日にサンティアゴを訪問し、13日にはサンティアゴ市中央墓苑を訪問したが、11日には巡礼（romería）と呼ばれる軍事政権下の暴力事件に関与した軍警察当事者の無処罰状態に抗議するデモも行われていることを現地報道で知った。軍事政権時の暴力、災厄をめぐる言説は今日に至ってもなお様々な角度で変成されつつあり、文学テクストもその運動に無縁でいるわけにはいかない。CADAでの街頭パフォーマンスを通して、海外では安定した経済情勢下にあると考えられていたピノチェト事政権下で〈ないこと〉にされていた貧困層の実態を世界にアピールすることから表現行為をスタートさせたエルティッツとスリータは、その後も小説や詩という形に表象の場を移行させつつも、民政移管を挟んで直近の過去に起きた災厄をめぐる言説編成に積極的に加わり続け、その過程で社会的周縁にいる人々や暴力の犠牲者、失踪者、その遺族といった人々に向き合い続けることで、結果的にポスト軍政期の社会的包摂という重要な課題に文学の立場から一定の解答を示したといえるだろう。作品の詳細な分析を通したその実態解明については稿を改めることとしたい。

参考文献

Barrientos, Mónica, 1997, *"El reclamo de la herida". Textualidades corporales en la obra de Diamela Eltit.* University of Pittsburgh.

———— (ed.), 2017, *No hay armazón que sostenga. Entrevistas de Diamela Eltit.* Editorial Universidad de Talca.

Baugher, Joyce, 2007, *Feminist Vision: the Act of Writing, and the Female Body in the Novels of Clarice Lispector, Lya Luft, and Diamela Eltit.* Tulane University.

Díaz, Carolina, *On the Uses and Abuses of the Past: Cecilia Vicuña and Diamela Eltit's Art and Literature.* The State University of New Jersey.

Eltit, Diamela, 1983, *Lumpérica.* Las Ediciones del Ornitorrinco.

————, 2008, 1, *Lumpérica.* Seix Barral.

Espinosa H., Patricia, 2018, *Diamela Eltit. Política de su narrativa ficcional : estudios desde Chile.* Garceta.

González, Jill, 2013, *Resisting Bodies : Margins as a Site of Political Transgression in the Works of Diamela Eltit, Guadalupe Santa Cruz and Pedro Lemebel.* Boston University.

Kulawik, Krzysztof, 2009, *Travestismo lingüístico. El enmascaramiento de la identidad sexual en la narrativa latinoamericana neobarroca.* Verbuert.

Llanos M., Bernardita, 2006, *Letras y proclamas : la estética literaria de Diamela Eltit.* Editorial Cuatro Propio/Denson University.

松本健二，2018,「乱反射する苦痛と希望－ラウル・スリータ『楽園前』に関する考察－」, Estudios Hispánicos, 42, pp.51-84.

————, 2019,「トラウマ的記憶を詩にする困難－ラウル・スリータ『その消え失せた愛に寄せる歌』に関する考察－」, Estudios Hispánicos, 43, pp.57-80.

Neustadt, Robert, 2012, *CADA día : la creación de un arte social.* Editorial Cuarto Propio.

Oviedo, José Miguel, 1998, *Historia de la literature hispanoamericana 4. De Borges al presente.* Alianza, 462.

Powell, Tiffany Marie, 2000, *Self, Systems, and Spaces : Subversive Strategies in the Narrative of Diamela Eltit.* The University of Texas at Austin.

Rojo, Grínor, 2016, *Las novelas de la dictadura y la postdictadura chilena. ¿ Qué y cómo leer?* Vol.1. LOM.

Slobodian, Jennifer, L., 2016, *Metafiction in Mourning : The Intersection of Gender Performance and Postditatorial Memory in Novels by Luisa Valenzuela, Clarice Lispector, and Diamela Eltit.* University of South Carolina.

Sooudi, Roxanna, 2004, *The Affective Subject : Reading José Donoso and Diamela Eltit.* Columbia University.

Talley, Virginia Burnice, 2007, *Hybridity in the Novels of José Donoso, Diamela Eltit, and Pedro Lemebel.* University of Virginia.

Young, Stephenie Ann, 2005, *The Limits of Testimonio, Language, and History : A Reading of Diamela Eltit and Contemporary Chilean Discourse.* Binghamton University.

Zurita, Raúl, 2018, *La vida nueva. Versión final.* Lumen.

この研究報告は科学研究費基盤（C）17K02618「チリのポスト軍政期文学の挑戦：スリータとエルティッツの文学に関する総合的研究」の支援を受けている。また 1.

「エルティッツ『ルンペリカ』について」は2020年1月25日に東京スペイン語文学研究会（於：慶応大学日吉キャンパス）で行なった口頭発表「戦いの場としての公共空間－ディアメラ・エルティッツの概念小説『ルンペリカ』について」に基づいている。